

## 情報化時代における教育と研究 - 大学の場合 -

H I T O N O M E - T O K I N O M E

### ひととの目の



### 時の芽

情報化時代という言い方に象徴されるように、今日では、その影響が私たちの日常生活にまで及び始めている。当然ながら、大学にもその影響が及び、学生たちへの教育の一環として、情報処理とそれに関連したいろいろな技術や技法がとりあげられ、それらの修得が大事な教科となっている。また、この方面の教育に対し、学生たちの多くからの要求も当然ある。これらの修得が、彼らの将来の歩みにとっていろいろな面で有用な役割を果たすことが、当然のことながら期待されているからである。

だが、今述べた知識や技術は全て既成のものといってよく、そうであるからこそ、実用に供せられるのだという事実を忘れてはならない。新しい知識や技術の開発は、この方面でも、ごく少数の限られた人びとによって進められているのである。

先に触れたような既成の知識や技術の教授に対し、大学の業務で大事なものに研究という事業がある。この事業は、研究者としての教員たちが中心になって進めるものだが、情報化時代に対応した変化が既に起こりつつある。伝統的には、研究の成果は、それぞれの研究領域の専門誌に、研究論文の形で従来公表されてきている。文字や図表に表現されたものが印刷されて、これらの成果が私たちの前に提示されるのが従来の行き方であった。そこに新たに現れてきたのが電子媒体で、研究の成果を何の制限もなしに、私たちはそこに公表することが可能となっている。

このままだと、研究における先取権が失われる怖れがあるので、電子媒体を通じて公開された研究成果を、国際的に登録する試みもなされており、一部では既に実用化されている。研究者間における研究上の議論や意見の交換なども、電子媒体を通じて即時になされるようになってきているので、研究の仕方や研究成果の公表の方法なども、従来の伝統的なものから違うものとなりつつある。

研究の成果は、当然予想されるように、新しく創造的な内容を含むものでなければならぬから、その検討に時間的な余裕のあることが必要だと、私は考えるのだが、現状は逆で時間に追いかけているように感じられてならない。現在のところは、まだ過渡的な段階にあるといってよいだろう。今後10年もしたら、大学における教育や研究の仕方や中味が、大きく変わったものとなるのであろうが、知識や技術習得の場と研究における創造的成果の公表という役割が引き続き求められることには、変りはない。

神奈川大学教授  
前学長 桜井邦朋

さくらいくにとも  
京都大学理学部卒。京都大学工学部助教授から、NASA主任研究員、メリーランド大学教授。帰国後神奈川大学工学部教授、神奈川大学学長（平成9年7月から平成12年7月）を経て現職。高エネルギー宇宙物理学の世界的権威で、著書に「宇宙には意志がある」、「湯川秀樹 白紙の講義録」（平成12年9月）など、専門書から一般書まで多数。